

鶴見文化財学会報

Tsurumi Cultural Properties A.C

vol.9
2008年3月14日発行
鶴見大学文化財学会

—青き春の時代の人々へ— 「にもかかわらず、よし」

関 幸 彦

元氣ですか、文化財学科が誕生してそろそろ10年となります。早いものです。平成10年(1998)4月、私もこの学科が生まれた年に着任しました。そしてこの10年の節目に本学を離れることとなりました。誌面をおかりして卒業生・在校生の皆さんにご挨拶したく筆を執りました。

鶴見大学とのご縁は、文化財学科ができる遙か以前のことです。かれこれ20数年にもなります。当時文部科学省に勤務していた私を先輩の大三輪龍彦先生が非常勤講師として紹介してくださって以来の縁です。

その頃は、文学部には女子学生しかおりません。何しろ大学での授業は初めてのことでした。おおよそ信じ難いでしょうが額にタラタラ汗をかきつつ、うつむきながら授業をしたことを覚えています。あの程良い緊張感は何とも懐かしい気がします。“威風堂々”？“厚顔無恥”？の今の授業態度からは想像もできないと思うでしょうが。

“初心忘れるべからず”とは、能楽の世阿弥の詞ですが、内に省みて、やましからずの精神だけは忘れないようにしたいと思っています。

考えてみれば、文化財学科とともに歩んだこの10年は、まことに充実の日々でした。学問上でも友人関係でも、全てにわたり“善し”とすべき時間だったと思います。故郷とは何かと問われたら、もちろん、気持ちの上でのことでしょうか、燃焼度が高かった場所、組織、時間の集合体ということでしょう。その意味では、鶴見の文化財学科は自分にとっての故郷だと考えています。

それはともかくとして、しばしば指摘されることがあります、歳の二乗が人生の節目であると。2²=4歳は自分とそれを取り巻く血縁(父、母、兄弟)、つまりは家族での位置が自覚できる年齢です。3²=9歳は男女の性差とともに異性への恋心が目覚める年齢。皆さんたちの恋の芽生えもこの時期だったはずですよ。4²=16歳は個我としての自分と社会との関係の距離に悩む時期、時として暴走の時期でもありますね。反社会的行動、父母への反抗が訪れます。

そして高校から大学への準備期間ということになります。5²=25歳。大卒後に社会に出て荒波をまろに受ける年齢です。おそらく卒業生の多くはこの世代に該当しているはずですよ。早い人は結婚し、家庭を築く年齢でしょう。

そして、6²=36歳。子供が誕生、夫が父に妻が母となる歳です。社会と会社、それぞれの要となる時期、青年から壮年への転換が訪れます。

7²=49歳。ここに至って、それぞれの組織におけるリーダーの職責が与えられるはずですよ。私自身のことでは、文化財学科の教員として、着任して数年後のことで、たしかに燃焼の真只中だったかもしれません。

8²=64歳。当然リタイアの時期となります。会社人間も定年を迎え、家族・社会との関係を見つめなおす段階です。還暦がすぎ、年金受給の年齢ということでしょうか。さらに最後の9²=81歳です。男女ともに現在の日本人の平均寿命になります。まさに最晩節の時期です。“人生の上り”がこの歳ということでしょうか。

今、ここでくどくどと話をしたのは、私が身の人生をいささかの懐かしさを以って思い返したかったからです。私は今年で56歳をむかえます。まさに7²=49歳、8²=64歳の間に位置します。10年の歳月は、物事の原理が融解するタイムスパンだとされます。鶴見大学文化財学科と向き合い充実した日々の私にも、この10年の節目で、自己の緊張の意識に何がしかの融解が起き始めました。

その正体が何であるかは定かではありませんが、新しい世界に自分を追いつめたくったのです。人間は与えられた運命とどう対峙するのか、おおげさに言えば、この運命の受け入れ方で自身の生涯の善し悪しが決するのではないかと。安定し、安心でき、かつ素晴らしい仲間たちが集う鶴見大学から離れることは忸怩たるものもあるのは間違いありません。「にもかかわらず、よし」とあえて決めました。さらなる自身の燃焼のために、新しく乞われた場所に赴こうと。この選択が正しかったかどうかは、誰にもわかりません。だからこそ、「にもかかわらず、よし」という形でさせるのかもしれない。

私と同じく在校生・卒業生の皆さんたちも、人生の節目には必ず迷いがあるはずですよ。とりわけ“青き春の時代”の中にいる諸君には、道に迷うことがしばしばあるでしょう。でも、結果的に「にもかかわらず、よし」、「にもかかわらず、よいではないか」という、開き直りとも見えるブレない生き方をして欲しいと思います。

青春とは決して年齢という肉体的時間の枠内ではありません。「にもかかわらず、よし」という意識さえ持つならば、“青き春の時代”は自己の中にいつでも再生できるはずですよ。私も新たに職場で皆さんとともに、もう一度、このチャンネルに射程を据え、リセットするつもりです。

鶴見大学文化財学科との550日

伊藤正義

平成18年6月27日 表題の550日は、故大三輪龍彦教授の御命日から平成20年1月2日までの日数です。以下、その550日の日々をつづてみます。

平成18年6月27日、午前10時前、私はいつも通りに文化庁記念物課に出勤しました。しばらくすると、鎌倉市教育委員会の世界遺産登録推進担当課から、大三輪教授が急逝したとの電話連絡が来た。あわてて神奈川県教育委員会に連絡して事実関係を確認した。その日は午前中も午後も打ち合わせと会議が詰まっていました。昼休みに東北福祉大学の岡田清一教授に電話して、中世史関係者への連絡をお願いした。課の非常勤職員に岡田教授の娘さんがいて、携帯電話を借りて連絡しました。彼女は鶴見大学の卒業生で、関幸彦教授の推薦で非常勤職員になっていました。彼女がいなければ岡田教授への連絡は思いつかなかった。因縁めいた偶然でした。

鎌倉市役所からの連絡によれば、御遺体は御自宅にまだ戻っていないとのことでしたが、夜7時過ぎに役所を出て鎌倉の浄光明寺に向かい、8時頃にお寺に着いた。少し前に御自宅に戻られたそうで、覚園寺御住職が枕経をあげていました。お線香を上げて帰宅の途についた。途中でお悔やみに訪れる方達とすれ違った。10時前頃に横浜三ツ沢に帰宅して長い一日が終わった。そのすぐあとに河野真知郎教授から電話が来た。「大三輪さんの遺言だ。鶴見大学に來い。鶴見大学文化財学科と私の御縁はこの日に始まったのです。」

史跡部門調査官 私は8年間、福島県立博物館に学芸員として勤務し、故石井進先生の推薦で文化庁記念物課の文化財調査官に転動しました。担当業務は、史跡の現状変更の指導・許認可、史跡指定のための調査研究、史跡の保存管理、史跡の整備活用、史跡等の公有化補助金など多岐にわたります。世間とのトラブルの最前線に立つ、ストレスの多い職務でした。「踊る大捜査線」の「事件は会議室で起きているんじゃない、現場で起きているんだ」の青島刑事のセリフが気に入っていました。出来るだけ早くトラブルの現場に立つことが、被害を最小限に押さえて解決する決め手でした。

13年間の私の在任期間に史跡部門の調査官は三人入れ替わりしました。平均在任期間は10年前後です。後任人事は主任調査官が案配し、結果を知らされただけでした。鶴見大学文化財学科に移ることが決まり、私の後任の主任調査官を捜さなければならなくなった。18年度の史跡部門の調査官は、古代史二人、中世史一人の構成で、二人が県教育委員会からの割愛、一人が奈良文化財研究所からの出向でした。三人で相談して40才代から50才代の中世史の研究者をリストアップしま

した。記念物課長の指示で、文化審議会文化財分科会の第三専門調査会史跡部会の在京の先生方と相談して候補者を絞り込みました。課長の了解が得られると、課長から上に後任人事案件として上がります。上の了解が下りると、本人を説得するために私が連絡をとりました。私はこの過程を全て部門内で相談・共有して進めました。主任調査官の後任人事は、他の二人の調査官にとっても重要事案ですし、選考・調整の過程を学習・継承しておくことが大切だと考えたからです。

鎌倉の世界遺産 平成17～18年度は、世界遺産登録申請のための会議、史跡指定、追加指定、保存管理計画の策定などの準備作業がピークを迎えていました。大三輪教授の急逝は、指令塔を失ったことを意味しましたが、準備作業の遅滞は許されません。現在は、五味文彦放送大学教授、河野教授を中心に準備作業が進められています。

鎌倉の世界遺産登録への道は、これまでの日本の遺産登録の中で最も難易度とリスクが高いことは間違いありません。鎌倉の場合は世界遺産登録はゴールではない。狭い都市の中で文化財と市民生活・観光産業などが共存する、困難な努力と模索を永遠に続けて行くことを、世界に約束することに意味があるのです。鎌倉市・逗子市・横浜市・神奈川県は、ようやく本格的な文化財の保存と活用のスタートラインに立ったに過ぎません。神奈川県は文化財行政の先進県のように思われるでしょうが、他県と同様に埋蔵文化財・発掘調査行政が中心で、史跡の整備活用に関しては遅れた県の一つです。鎌倉の世界遺産登録が、文化財保護行政のターニング・ポイントになることを期待しています。

鶴見大学文化財学科 授業では戦国時代史、中世城館論、文化財保護制度概説などを行っています。ゼミ形式を中心にしたと思っていますが、まだ学部授業ではそこまで到達出来ていません。大学院の授業では越後国人領主・色部氏の史料と郡絵図を読んでいます。院生諸君と一緒に史料を精密に分析すると、一人で読んでいた時とは全く別の読み方や解釈が見つかります。

私は研究課題をいつも現場から見つけ出ししてきました。片瀬・腰越が龍の口ならば、鎌倉を取り巻く山稜が、私には龍の体に見えてしまいます。地域に密着して、じっくりと史料と景観、遺跡を読み込んで、現地からそこに生きていた人々の足跡を復元しながらたどる、現場主義の歴史学を学生諸君に継承して行きたいと願っています。「歴史は教室で起きたのではない、歴史は現場で起きた」のだから。

文化財学会 春季・秋季大会関連報告

〈春季大会〉

講演「正倉院の世界

—正倉院文書と文化財—

報告 2年 小林 壹考
平井里永子

平成19年度文化財学会春季講演会は、6月2日土曜日に行われました。今回の講演では「正倉院の世界—正倉院文書と文化財—」と題し、宮内庁正倉院事務所に勤務されている杉本一樹先生をお招きし、ご講演していただきました。

はじめに、正倉院は東大寺大仏殿裏手の山側にあり、校倉造りの床下3m程度の大きな建物であることを写真を使ってお話されました。また、10月に勅封という天皇の命で行われる「正倉院御開封の儀」についても詳しくお話をしていただけました。

次に、「正倉院文書」とはどのようなものか、ご解説いただきました。「正倉院文書」とは、主に東大寺の写経所の文書を指し、その古文書を総称して「正倉院文書」というそうです。「正倉院文書」に使用された用紙は、奈良時代の公文書、つまり「戸籍・計帳」、「正税帳」、「中央官庁の公文」などの裏紙を利用して写経したものが多く、墨や紙を支給してきた人の作業の様子が書かれた文も、写経用紙の裏に残っていたりするそうです。そのため、この「正倉院文書」は、当時の事を知るうえで非常に貴重な資料であることを、実際の文書を提示しながらお話されました。

東大寺の写経所は、一切経というお経の大全集を写すことを目的とした役所だったそうです。主に写経が仕事であるが、紙の調達や紙を張り合わせ、巻物にする作業を行う人々もいたそうです。奈良時代は、仏教で国を治めようとしていたため、この写経所の仕事は大変大きな仕事であったそうです。

これらの古文書の保存は、紙の素材や写経のために再利用されたものなどがあるため、遺存状態も保存状態も違うそうです。近年、保存科学が学問の分野として水準が上がっており、この技術を使いながら、カビ・虫害などから古文書を守るため、どのような場所に置くのが適切なのか見極める事の大切さをお話していただきました。

そして、正倉院の千何百年も経つものを扱う人は、文書がどのような状態なのか、モノに触れず、モノを見て考える事により、その文書がどのように扱われたがっているか、その声を聞くことが大切であると、御教授されながら杉本先生は講演を閉じられました。

〔正倉院文書 研究の手引〕

- 1 原本 正倉院宝物(宮内庁正倉院事務所保管)
庫外流出
現存しない/確認できない文書(焼失・所有者変遷)
- 2 目録 奈良帝室博物館正倉院掛 印行(覆刻1984年
文献出版)→現在 正倉院文書管理上の典拠
- 3 写本 幕末天保年間以後、明治にかけての写本
(写本が独自の意味を持つケースは限られる
…原本所在不明、現状変更)
- 4 刊本 活字翻刻
東京大学史料編纂所 編『大日本古文書』(編年文書)
25冊(明治34年～昭和15年)
『大日本古文書』全文データベース
(東京大学史料編纂所HP内)
東京大学史料編纂所編『正倉院文書目録』1-5、
東京大学出版会
→1正集・2続修・3続修後集・4続修別集・5塵芥
寧楽遺文
林陸朗・鈴木靖民編『復元 天平諸国正税帳』
現代思潮社1985
- 5 写真資料
佐々木信綱『南京遺文・南京遺芳』
大正年間 昭和62年覆刻(八木書店)
宮内庁作成 マイクロフィルム(モノクロ)
昭和30年代
国立歴史民俗博物館作成 コロタイプ複製品
昭和56年制作開始
国立歴史民俗博物館作成 『正倉院文書拾遺』
創立20周年記念
宮内庁正倉院事務所 編『正倉院古文書影印集成』
1~15 八木書店 昭和63年
- 6 工具書 目録・索引
栄原永遠男『正倉院文書研究文献目録』1-4、『正倉
院文書研究』1-3、10 1993-95、2005 吉川弘文館
竹内理三・山田英雄・平野邦夫『古代人名辞典』
1-7 吉川弘文館
木本好信『奈良朝典籍所載仏書解説索引』
国書刊行会、1989
関根真隆『正倉院文書事項索引』 吉川弘文館、2001
直木孝次郎編『正倉院文書索引』 官司・官職・地
名・寺社編 平凡社 1981
→上記4種は、実質的に『大日本古文書』を底本
とした索引
字体データベース (cf.奈良文化財研究所 木簡書体DB)
- 7 概説
杉本一樹『正倉院文書』(『日本古代文書の研究』平
成13年2月、2001、吉川弘文館、初出『岩波講座
日本通史』1994)
杉本一樹『正倉院 文書と経巻』(週刊朝日百科
皇室の名宝05、平成11年5月、1999、朝日新聞社)
杉本一樹『正倉院の古文書』(日本の美術440号平成
15年1月、2003、至文堂)

〈秋季シンポジウム〉
「歴史転換点の“武力”」

報告 2年 平井里永子
1年 富樫祐未子

平成19年度文化財学会秋季シンポジウムは「歴史転換点の“武力”」と題され、11月17日土曜日に開催されました。

はじめに、本学教授の河野真知郎先生より「武力とは何か」という問題提起がありました。

その後、関連報告として、はじめに本学教授である伊藤正義先生より「鎌倉を護る龍神—蒙古襲来の恐怖—」という論題で発表していただきました。まず、鎌倉の世界遺産登録を目指した活動の概要についてのお話をされました。安房国安西景盛宅と鎌倉、三浦衣笠城、鎌倉城、鎌倉の地形と景観の特性—蔵風得水・四神相応の地—、切通と山稜部防御遺構の造営、蒙古襲来と鎌倉の加持祈祷体制—鎌倉を護る龍神—について論じられました。

次に、本学博士前期課程2年の堀口和俊氏から「支配勢力に翻弄される在地勢力—武蔵国三田氏について—」と題して発表がありました。堀口氏は、戦国時代の武蔵国在地領主三田氏を、東京都青梅市に残る史料「谷合家文書」と『小田原衆所領役帳』を使って「武力」の面から考察されました。その中で、関東管領上杉氏に仕えていたころと小田原北条氏に仕え三田氏が滅亡してゆくまでを述べられ、谷合久信が書いた「日記」にある「三田八十騎」という記述が、三田氏の「武力」を表し



ているのではないだろうかというお話をされました。

続いて、品川区立品川歴史館富川武史氏から「幕末期の品川台場警衛について—嘉永6～7年における江戸湾防備新体制の確立を中心に—」と題して発表がありました。富川氏は、ペリー来航以前における江戸湾防備、嘉永6年ペリー来航と老中阿部正弘の対応、品川台場の築造と江戸湾防備新体制の確立について、諸資料や諸大名による品川台場警衛の変遷の表、現在の台場の現状の写真を使ってお話されました。

最後に、本学博士前期課程1年の福田舞子氏から「幕末期の軍事情勢について—千駄ヶ谷焰硝蔵を中心として—」と題して発表がありました。福田氏は、近代的軍備を整えていくなかで、幕府が火薬の存在を重視していた様子を国立公文書館内閣文庫所蔵江戸城多聞櫓文書の中にある焰硝蔵、および蔵の管理にあたる鉄砲玉薬奉行に関する史料から考察しました。そして、多聞櫓文書の焰硝蔵、および蔵の管理にあたる鉄砲玉薬奉行に関する史料を通じて、幕末期の軍事情勢に幕府がどういった姿勢で対応をしたのかということについてお話されました。

シンポジウムの締めくくりとして、パネルディスカッションが行われました。本学教授の河野先生を司会に、講演者の方々を交え、会場からの質問に答えていただきました。予定が押していましたが、河野先生の進行で質問用紙に書かれた聴講者からの質問に講演者が解答するかたちで行われ、秋季シンポジウムは盛況のうちに幕を閉じました。

学会 左見右見

一年間を振り返って

1年 飯田 華子

この一年間の大学生活を振り返ると、高校と違ってのびのびと学ぶことができたという面と、自分たちが「ゆとり教育」世代であることを改めて実感した面がある。

それは、自分の知識の浅さを感じたことによる。

さて、実習ⅠAのレポートでは、調べる過程で今まで何の興味も無かった分野に興味を持つようになり、行き慣れていた鎌倉も実習で行くとまた違った面白さを感じた。実習ⅠAを通じて今までとは違った見方ができるようになったのは、私の中で大きな収穫であった。

また、実習ⅠBや文化財研究法を通じて、私の中の文化財への意識も変わった。それまで私は、文化財の修復は全て「技」の世界だと思っていた。しかし、実際は「技」はもちろんだが、科学的な側面から調べる他、資料批判をしてその文化財がどのようなものであるか、歴史的にどういう位置づけになるのかも必要なのだ実感した。

さらに、この一年間で、文化財は単に、宝石のように扱えばいいというものではないということも感じた。もちろん、宝石以上の嚴重な扱いは必要だが、後世に伝えてゆかなければならないのは見た目に美しいものばかりではないし、たとえば綺麗な工芸品等でも「素敵ね」で終わらせてはならない。そうしたものから、その当時の人々の実態を明らかにしてゆく。まるで、検察官のようである。しかも、犯人の痕跡を採取する知識と技術だけでは駄目で、あらゆる分野の知識と技術をもってしないと、犯人の姿は見えてこない。そこまでして、自分のルーツを知ろうとするのは人間だけだろう。

今年は昨年よりも、幅広い知識を身に付けたいと思っている。



文化財学科で一年間学んで

1年 宇野 夏樹

私が鶴見大学の文化財学科に入って一年が経ちました。

短く感じられる一年間でしたが、様々な事を体験することができました。それは、大学で学ぶという事と多くの歴史に興味を持った人たちと一度に友達になれた事に始まり、色々な場所への巡検や一泊参禅会、複製の土器を使っての実習の授業など、高校までの授業を遥かに超える学業のことであつたり、夏休みに友達で行った鎌倉と藤沢での発掘のアルバイト、以前からやってみたかった海釣りなど、まだまだ沢山あります。

中でも発掘のアルバイトと土器を使った実習の授業はとても良い経験でした。

発掘のアルバイトは8月～9月にかけての十日余りの短い間でしたが、鎌倉と藤沢という場所や時代の違う現場で働かせていただき、小さい頃からの夢であった発掘現場を生で体験することができました。

土器を使った実習の授業では、復元、実測から報告書を作るまでの大変さと、重要さを知ることができました。

この一年間とても早く過ぎてしまい、あっけにとられるばかりです。来年度2年生になってもこんな刺激的な一年を過ごせることを願っています。

2年生での生活

2年 梅田奈央子

4月から大学2年生の生活が始まり、あっという間に時間が過ぎていったように感じます。

2年生になって一番感じたことは、授業内容が1年生の頃よりさらに充実していたことだと思います。鶴見大学に入学し、文化財学科で学んでいく中で、今まで知らなかった文化財の世界に触れることが出来ました。実習ⅡA、ⅡBをはじめ、博物館学や様々な文化財各論、有職故実など、ありとあらゆるものが自分の興味のある授業だったので、毎日の勉強が充実していたと感じています。

しかし、勉強が充実していた分、レポートや試験で苦戦することも多くありました。特に、文化財についての保存や修復、活用について学んでいく中で、文化財をどうしていくべきか考えさせられました。レポートで出されたときは正直難しすぎて、投げ出したくなりました。それでも様々な資料を読み、また友達からアドバイスをもらったりして、自分なりに考えをまとめることが出来ました。

このようなレポートで、改めて感じたことは、

文化財には様々なものがあり、その1つ1つで保存や管理の方法も違ってくるといことです。当たり前前のことですが、その当たり前前に難しさを感じました。保存や管理には工夫が必要であり、同時に費用や時間がかかるという問題もあります。そのような問題を解決する努力があるからこそ、日本の文化財に現在でも触れることが出来るのだと思いました。

このように2年生になり、自分自身が今まで考えたことのなかった、文化財に対する考えを学ぶ機会に恵まれました。これからもさらに文化財について知識を深めていきたいです。3年生からはゼミもあり、私は希望していた永田ゼミで頑張りたいと思います。永田ゼミは保存科学の分野ですが、前々から保存科学に興味があり、このゼミを希望しました。自分の希望が通ったのだから、この与えられた機会の中で精一杯頑張っていきたいです。

また、2年生の時間割の都合上、取れなかった授業を3年生では学んでいきたいです。大変かもしれませんが、今ある時間を無駄にしないように頑張り、これからの大学生活でさらに、文化財について考えていきたいと思っています。



充実した一年間

3年 和知 瑛希

この一年を振り返って見ると、文化財学科の3年次は非常に充実していたと思う。

文化財学科といえば、他の学科にはない実習がメインの学科である。3年次の実習の一つ目は、精密機械を多数使用した、文化財の科学的な調査がメインである。蛍光線分析装置や電子顕微鏡、FTIRなど文化財に最新技術を利用して解析するという非常にやりがいのある実習であった。

二つ目の実習は、夏休みに行く実習旅行だ。私達は、四国の金刀比羅宮を中心に、伊弉諾神社などメジャー・マイナー問わず色々な文化財にまつわる施設や場所を周った。その中でも、金刀比羅

宮の本宮までの階段は、正直とても大変であった。四国は元から暑い上に、果てしなく続くのではないかとと思われる様な地獄の階段を30分以上登り、やっとのことで本宮に辿り着くのである。この時、「教授の方々は、私達を嫌っているのではないだろうか」とさえ思えたほどである。

宿に着いてからも、三年間共に勉強してきた友人達と過ごす時間は、非常に充実したものであった。また、教授の方々からは日頃聞けないようなお話をして頂き、寝る間も惜しいほどの楽しい時間であった。

しかし、後期に入ってから就職活動が本格的に始まり、多忙な日々が続いている。残る一年を、これまでの経験を活かして乗り越えていきたい。



経験の4年間

4年 児玉 和彦

私にとっての大学生活を一言で表すならば、「経験」の4年間であったと思います。入学当時何もしないで漠然と毎日を過ごすのは嫌だと思い、色々なことをしてきました。

1、2年次は鎌倉での発掘に夢中になり、大学の講義だけでは勉強できない現地でのフィールドワークを経験できました。またそれと併せて部会やサークル、文化財学会の委員としての活動を行い、大学生活最初の2年はまさに色々なことへの挑戦の年であったと思います。

3年次にはサークルの部長、学会の委員長となり講義と併せて大変な毎日を送ることになりましたが、その中で人の上に立つことの難しさ、大変さを学びました。学会と並行してある様々なことに対処できず学会の仕事にも手が回らなくなり、委員長として適切な指示を出すことができず、周囲には多大な迷惑をかけました。今思い返しても私は決して委員長という立場に相応しい人間ではなかったと思います。それはサークルにおいても言えることです。

学会に入って最初のシンポジウムで、石田先生がおっしゃっていた「勉強とはただ机にかじりついてするものだけではない、様々な経験を積むことも勉強だ。この学会もぜひそういう場であってほしい」という言葉が今も残っています。ここに書ききれない様々なことに挑戦してきましたが、そのどれもが成功したわけではなくむしろ失敗の方が多と思います。しかし、いつもその根本にあったのは何か自分を变えたい、活かしたいという気持ちです。結果、この大学生活の中で経験してきたことは、また新しい一歩へと繋がりました。大学生活はただ勉強するだけではなく人生の勉強をする場であり、それが許される場であると私は思います。失敗を恐れず沢山の事を経験し、それを自分の糧にしていくことが大事なのではないでしょうか。在学生の皆さんもただ毎日を漠然と過ごすのではなく、様々な経験をしてほしいと思います。



文化財に触れる

—実習Ⅳを経験して—

4年 戸田さゆり

今年度の実習Ⅳ国内コースは、福江島・長崎・平戸・山口を巡った。

長崎といえば、日本列島の最西端に位置し、中国や朝鮮半島に最も近く、外来文化の入り口の役割を果たしてきた所である。そのような土地柄から、今回の旅は「海外交易」、キリスト教」の2つのキーワードに展開された。

最初に訪れたのは、多くの教会があり、キリシタンの歴史を残す五島列島の福江島である。井持浦教会や堂崎天主堂などの他に、五島最古の寺院である明星院、絶景の大瀬崎、一面青々とした芝生の鬼岳などを巡り、豊かな自然と史跡に恵まれた島を堪能した。

福江島の次は、長崎市内へと向かった。長崎で

特に印象に残っている場所は出島である。

出島は現在、復元事業が進められている。学芸員の方から、復元に絡む様々な事情や今後の課題について説明していただき、復元の難しさを教わった。復元事業は長期的に行われていくそうで、これからも注目したい場所である。

さらに長崎から平戸へ向かう途中、生月島に立ち寄った。島には殉教遺跡が点在していて、カクレキリシタンの独特の信仰を知ることができた。

平戸では、「寺院と教会の見える風景」として平戸のシンボルとなっている場所が印象に残っている。教会へ通じる石畳から、寺院の屋根瓦の堂宇が見え、背後に教会の尖塔がそびえていて、その奇妙な調和が、平戸の歴史と今を美しく物語っていた。

最後に訪れた山口は、大陸との交易によって莫大な利益を得た、大内氏の根拠地として発展した所である。京都の文化を山口に移入し、発展させた大内文化の面影を留める瑠璃光寺には、国宝の五重塔があり、周辺の緑や池と調和していて穏やかな雰囲気醸し出していた。旅の終わりに相応しい、美しい場所であった。

文化財学科に入学して、様々な場所を巡ってきた。今後も、いま自分が生きている時代、その時知りうる美しい文化に触れていきたいと、あらためて思わせる旅であった。



各学年の実習の感想

今年行った実習について

1年 富永 正義

鶴見大学に入学して一年が経とうとしている。この間を振り返ると、文化財学科の特徴とも言える「実習」が特に印象に残っている。

大学の1、2年は基礎過程を学ぶ、というイメージがあった。しかし、実践的な学習を行う「実習」は前期から始まった。前期の実習ⅠAは様々な博物館や史跡を見学して展示物がどのように保存され公開されているかを学んだ。今まで博物館などに行ったことはあるが、保存・展示の仕方についてまでは考えたことがなかった。例えば、一泊実習で行った「国立歴史民俗博物館」では町並みの模型などを多く取り入れ、当時の生活を「復元」して展示されている。文化財は保存するだけでなく、どのように展示・公開するかという視点をこの実習で学んだ。また、宮内庁正倉院事務所に勤務されている杉本一樹さんのお話を聞く機会もあった。正倉院文書について、実際に携わる方のお話が聞けたことは貴重であった。

後期の実習ⅠB（考古遺物の復原・実例）では、「調査報告書」に掲載するまでの過程を学んだ。始めに各人に渡された土器片を順に接合させていく。簡単そうに思えたが、接合する順番を考えると上手くゆかず最初の頃は手間取った。土器を「復原」した後、実測図を作成した。櫛で出来た文様の大きさ、形などを読み取るのには苦労した。土器を観察してゆくと重なりや方向などの文様の違いがあり、細部に注意しながら製図を完成させた。その後石器の拓本と、土器の撮影・トレースを行った。トレースは「だま」が出来ないよう書くのは未だに上手くいかない。このような過程を経て、発掘だけでなく、考古資料の整理もまた重要であると知った。



河野先生が以前話されていたが、まだ「(文化財の)入り口に立っただけ」である。学ぶことは多々あり、実習や他の科目を通して「文化財」への理解を深めていきたい。入学当初に抱いていた「文化財を次の世代に」という思いを忘れずに。

実習ⅡAを通じて

2年 杉浦 有史

私は今年度の後期に実習ⅡAで古文書の補修と取り扱いについて学びました。古文書を見たり、触ったりする機会は日本全国を探してもなかなか体験できることではないと思われましたので、大変楽しみにしていました。

しかしその反面、うまくできなかつたらどうしようという不安な面もありました。

実際に実習で用いた古文書は疑似文書であったため少し安心しました。はじめは虫に食われて穴のあいた部分を補修する「繕い」という作業が行われました。なるべく穴と同程度の大きさのものを貼っていくのですが、私は手先があまり器用ではないため最初の内はなかなかうまくいかず、何度もやり直しをしてしまいました。さらに、同じ作業が何十回も続くので集中力が次第になくなっていき、作業が雑にならないようにするのが大変でした。一枚の文書の修理が出来上がるたびに、修理調書と呼ばれる報告書も作成しました。補修してそれで終わり、ではなくその後の処理も自分で責任をもって行い、いかに古文書が貴重な文化財であるかを学びました。作業の合間に文化財を扱うプロの修理技術者の「繕い」の様子をビデオで観ました。その中で、私たちと同じ行程で行っている姿が映り、自分がプロと同じ事を行っているのだと感嘆する反面、自分の行う何倍ものスピードで丁寧かつ緻密な作業を進める姿は圧巻でした。

実習が後半にさしかかる頃には「繕い」はほぼ一回で補修できるようになり、「裏打」という作業に移りました。この作業は、「繕い」が緻密な作業だとすると、使用道具や補修するスペースが大きくなり、より慎重さを要求されるものでした。作業時間もゆっくりとはしてられず、なるべく他の人に遅れをとらないように急いで行っていました。十分な修理ができなかった時は、担当教員の石田先生に直してもらったりしました。この作業の後に行った古文書の講読からは、古文書に関するトータルな視点というものをあわせて学ぶことができました。

この実習ⅡAは2時限続きの15回ほどの授業で、技術的にはまだまだ未熟ですが自分の中で貴重な

体験となりました。来年の実習ⅢAでは保存処理の勉強を行います、益々興味をもって取り組んでいきたいと思います。

実習を振り返って

3年 三島 孝博

私は今年度、実習ⅢA・実習ⅢBの2つの実習を体験した。実習ⅢAは保存処理と分析の実習で、ⅢBは香川・徳島・兵庫の3県を巡る見学実習であった。

なかでも、実習ⅢAで行った分析の実習にとっても興味を持った。それは、1年次、2年次で体験してきた実習とは趣が異なり、主に理系の知識が求められるものであったからである。実体顕微鏡を用いて木片・焼き物の表面を観察し、そこから樹種の同定や、観察した焼き物の種類を考察した。しかしながら、樹種の同定を行うために、私が聞いたこともないような植物の細胞や器官の構造を、参考資料と比較しなければならなかった。焼き物でも同様で、色や形状などから考察をするのはとても大変であった。

また、この実習の中で一番苦労したのが、フーリエ変換赤外分光分析装置を用いて物質を同定するというものであった。この時間には、ある物質の赤外線吸収スペクトルのグラフから物質を同定したり、測定結果から物質の特定を行った。実体顕微鏡の時と同様に、参考資料を使用したのだが、化合物の名称や分子固有のグラフのパターンの説明をいきなり読んでみてもなかなか理解できず、レポートを書くのにとっても時間がかかってしまった。

このⅢAの実習は私にとって大変なもので、辛い日々であった。しかし、今振り返ってみれば理系の勉強ができたり、友達と意見や情報の交換をしたりと、充実したものであったと思える。

今後の実習や演習でも、興味・関心を持って積極的に取り組んでいきたい。

イタリア実習を終えて

4年 谷田部隆太

憧れの地、イタリア。海外実習Ⅳでの自分にとっての初めての海外です。その初体験を文化財の宝庫、世界遺産の故郷ともいべきイタリアに行くことで、大いなる刺激を受けました。

イタリアの気候は、9月初旬ということで、気温が高かったのですが、乾燥していたためさほどの蒸し暑さは感じませんでした。また滞在期間中、幸いにも雨が降ったのは初日の午前中のみで、幸

候にも恵まれました。

イタリアでの文化財巡検地は、ミラノ→ヴェローナ→フィレンツェ→ヴェネツィア→ポンペイ→ローマでした。お定まりのコースではありましたが、文化財の見学としてはいずれも外せない所です。ただ、欲張りすぎて移動時間が多かったのが残念でした。

イタリアで一番印象に残っているのは、パチカン市国にあるサンピエトロ大聖堂のシステーナ礼拝堂に展示されている『最後の審判』です。イタリア訪問の大きな目的は、これにありました。最終日の前日に行きましたが、いつもはホテルから出発するのはゆっくり目なのですが、この日だけは予約の都合上朝早く出発しなければなりません。現地に着くとたくさんの観光客が並んでおり、観光した中で一番人が多く、時間がかかりました。

システーナ礼拝堂に入って、展示されている作品全てが、当時の情景を思い起こさせてくれるようです。

しかし、一番感動したのはやはり『最後の審判』です。『最後の審判』は静寂の世界にたたずむようにそこにありました。その存在感は見る人を圧倒させるほどでした。しかし、それとは対照的に、視線を館内に移すと人々の多さに圧倒されたことも確かです。

他にも有名な観光スポットを短い間にたくさん見て回りました。埋もれたポンペイの史跡もまた記憶に残るものでした。

日本にもたくさん素晴らしい文化財がありますが、たまには外国の本物の文化財に触れてみるのもいいんじゃないでしょうか。



研究部会報告

研究部会連合

研究部会連合の活動は、研究部会の発展と共に部会同士の情報交換の場として、各代表が月1度の会合を開いて話し合いをしております。昨年に引き続き、今年は出だしが遅かったのですが、研究部会の活動をまとめた広報雑誌の『財の穴』を、後期の文化財研究法の授業の冒頭に配布させていただきました。そこでは『古典芸能研究部会』と『宗教研究部会』の代表が、それぞれ1年生を前にアピールをしていました。

また、今年は連合会にとっても新しいことがありました。

それは、1年生だけによる『宗教研究部会』の立ち上げで、後期から本格的に他の5部会の仲間入りを果たしました。新入生ながら、現存する部会にとらわれずに、興味のある分野が同じメンバーを集め、自らやりたい部会を設立してしまうところに研究熱心さを感じました。これは他の研究部会にも良い刺激になると思います。年内は特に活動していないとのことですが、これからは仏教や仏像見学とともに、他宗教も視野にいれた活動を行うとのことでした。

12月22日に行った合同企画は、本学の部活動である『能楽研究会』の協力を得て、目黒十四世喜多六平太記念能楽堂において、喜多流能楽師『中村邦生先生の会』の「船弁慶」を鑑賞しました。能を鑑賞するというのは、一見敷居が高そうにみえますが、それでも参加者は各研究部会から10人も集まりました。当日は、関幸彦先生のお話を30分と、約2時間の演能を鑑賞し、伝統芸能の美しさや奥深さなどに直に触れ、大変感動したという意見が大多数でした。今回の「船弁慶」は通常のものとは異なる演出があり、これは滅多に見られるものではありません。学生席で、ずいぶん得をした内容だったのではないのでしょうか。

最後になりますが、現在は残念なこといくつかの部会では、上級生しかいないという部会もあります。しかし、今年度の新入部員の殆どは1年生という嬉しい傾向にあり、かなり興味を引いたのでしょう。今後は、さらに部員獲得や活動の活性化に力を入れていくこと、そして、連合会議での研究部会同士の情報交換の場を数多く設けることを目標とし、興味を持った学生に少しでも多く入部してもらい、研究部会がますます発展して欲しいと願っております。これからも皆様のご協力を宜しくお願いいたします。

江戸東京研究部会

「江戸東京研究部会」(通称、江戸研)は、近世において江戸であった東京を中心とする地域を歩き、現地の歴史を知るということをモットーに、巡検を

主とした活動を行いました。今年度も年間を通してのテーマは設けず、様々な観点から巡検を行いました。

今年度最初の活動は、6月17日に行われた『江戸の民間信仰』と題した第27回目巡検です。東京の下町として有名な葛飾区柴又の柴又帝釈天をはじめとして、民間の信仰の対象となった寺社・仏閣に重点を置いて歩きました。

11月3日には、第28回巡検『「日本考古学は品川から始まった—大森貝塚と東京の貝塚—」見学と池上本門寺・大森山王地区の史跡巡検』と題し、本学大学院在籍富川氏が勤められている品川歴史館で開催された『日本考古学は品川から始まった—大森貝塚と東京の貝塚—』の見学と、展示見学までの間、池上から大森・山王地区にかけての史跡めぐりを行いました。この巡検では、富川氏に展示の説明をしていただきました。

12月16日には、第29回巡検『近世から近代へ—原宿—市ヶ谷の陸軍関係史跡を中心として—』と題し、原宿から市ヶ谷にかけての地域に江戸時代にあった大名屋敷や火薬庫は、明治時代に入りどのように受容され、変化し、現在にいたっているのか。その変化を感じることを目的として巡検を行いました。

1月6日には、第30回巡検『鈴木演芸場「新春爆笑特別興行」鑑賞』と題し、落語「崇徳院」「花見の仇討」「唾の釣」などの話の舞台となった忍不池界隈の巡検をし、その後、鈴木演芸場へ落語鑑賞に行きました。

また、2月3～4日には、第31回巡検の長崎巡検旅行も予定されております。

江戸東京研究部会では、自分達の興味・関心を持ったテーマで巡検を行っています。東京の中にも、沢山の史跡が残っています。いつも何気なく行っている、または、見ている場所が実は、すごい歴史の詰まった場所かもしれませんよ。少しでも興味をもっていただけましたら、巡検や月一回の例会にご参加下さい。

古典芸能研究部会

古典芸能研究部会です。この研究部会は装束を着たり、古典芸能の鑑賞や勉強会を通して理解を深めていくという活動を行っています。活動は年に2回、夏と冬に勉強会をしています。

昨年の夏は「装束の会」を行い、韓国の宮廷装束というテーマの下、青柳先生にご指導をいただきました。皇帝、皇后というくらいの高身分の人物の装束から、女官や武官、一般によく着られているチマチョゴリなどの装束を実際に着てみることで、韓国の文化や当時の人々がどのような服装をしていたのか体験することができました。

韓国の服は、チマチョゴリ、パジチョゴリという基本的な装束があり、着方は日本の十二単や着物に比べ、とても着易くなっています。日本の着物のよ

うに大きく作っており、帯や紐を使って調節していきます。チマとはスカート風のもの、チョゴリはたれ襟で袖は筒袖胸紐で止める上着を指します。パジは、男子の着る袴のようなもので、裾口を結んだズボン式のを着ます。皇帝は、この上から何枚も長い表着を重ねます。紐の結び方を覚えれば、大体の韓国の装束は着ることができます。また、女官は長い髪の毛を編んで頭の上にとまとめるという独特の髪形をしており、今回は再現した髪を被りました。

装束を着る人は前に出て、先生は着付けをしながらか説明をします。説明を聞きながら質問をし、理解を深めていきます。一通りの装束の勉強が終わった後は、自分の着たい装束を着てみます。帯の結び方を思い出しながら、時に手伝ってもらいながら憶えていきます。ドラマでも韓国の宮廷衣装を見る機会がありましたが、実際に体験することによってより身近に感じることができました。

今年度の冬の活動は雅楽の体験および鑑賞をしようという計画を立てています。

歴史考古学研究部会

歴史考古学研究部会は、古代から中世を中心に、歴史的な史料、文字史料、またはその他関連諸学を区別することなく、歴史についてあらゆる方面からの研究を目指しています。主に鎌倉を拠点とし、関東全域に目を向けた活動を基本理念としてきました。しかし、今年度は今までの理念と共に、関東だけでなく部員の興味に合わせ、地域や時代に固執することなく活動することができました。

特に巡検に力を入れ、今年度は7回の巡検を行いました。そのうち5回は「鎌倉巡検」です。この巡検では、海蔵寺、寿福寺、甘縄神明神社、御霊神社など社寺を巡るだけでなく、百八やぐらなどのやぐらや仮粧坂切通などの切通も巡りました。また、多宝寺跡にある覚賢塔や極楽寺の忍性塔などの五輪塔、調査中の発掘現場も見学することができ、とても有意義な巡検となりました。

このほかに、7月8日には江戸東京博物館で行われた『あおもり縄文まほろば展』、3月21日には千葉県の佐倉市にある、国立歴史民俗博物館に行きました。10月21日に『鎌倉切通ツアー』を予定していましたが、雨天のため行うことができませんでしたので、今後行う予定です。

今後の活動としては、2月上旬に3泊4日で大阪、三重、愛知に行く予定です。2月下旬には歴考研恒例巡検『鎌倉やぐらツアー』を行います。今後も部員の興味、研究に合わせた巡検を重視し、活発に活動していきたいと思っています。

宗教研究部会

私たち宗教研究部会は昨年平成19年10月に1年生教人で立ち上げた新しい研究部会です。仏教の歴史を学んでみたい、仏像に興味があるなど、宗教に関係

することを学びたいと思う者が集まって出来た部会です。

主に仏教を扱っていますが、キリスト教やイスラム教なども視野に入れて活動していきたいと考えています。

活動は月に1度メンバーで集まり情報交換などを行っています。また、学校の宗教行事には積極的に参加するように心掛けています。

今年は大船の観音様を見学する予定です。現地では顧問である尾崎先生が案内をさせていただきます。

まだ計画段階ですが、長期休暇の時には、興味を持ったお寺や仏像を見に行き、講演会などにも積極的に参加していきたいと考えています。

立ち上げて日が浅い部会であり、まだまだ足りないところはありますが、皆さんの意見を反映して、今年度はより良い企画を立て、活動していければと考えています。

宗教について興味のある方は、学年を問わずに、大歓迎です。

現代社会との関わり、私たちの生き方にどのように宗教が関わっているのか、一緒に探ってみませんか？

※当部会は、宗教に対する理解を深めようとする部会であり、特定の信仰を強要したり、勧誘したりするものではありません。

鎌倉研究部会

鎌倉研究部会は、文献学・考古学・美術工芸など様々な角度から「鎌倉」を考えていく部会です。巡検は鎌倉だけにこだわらずに、要望があればどこにでも行きたいと思います。そして、鎌倉という大きなテーマで考えていくのが当部会の目的です。

今年度の活動としては1年生の鎌倉巡検への同行と、合同企画の能楽鑑賞でした。

鎌倉の巡検では、1年生と共に寿福寺から山道を通して、高德院までの長い道のりを歩きました。鎌倉の地形を肌で感じる事ができたと思います。

また、合同企画では喜多流能楽師『中村邦生先生の会』の「船弁慶」を鑑賞しました。源義経、弁慶、平知盛など治承・寿永の乱の時期に関係深い登場人物に、とても興味が湧きました。

来年度の活動としては、今年度はなかなか活動が行えなかったため、活発に巡検に行きたいと考えています。巡検先も御家人の根拠地にまで足をのぼしたいと思っています。例えば、千葉氏（千葉庄）、葛西氏（葛西御厨）、下河辺氏（下河辺庄）などを考えています。

また、部員を獲得して部会を活性化させていきたいと思っています。

- 5 HP上での広報活動
 - 6 親睦その他の事業
 6. 本会に次の役員を置く
 - 1 会長（1名）は学科長に委任し、本会を代表し会務を統括する。
 - 2 委員（若干名）。委員は諸事業の企画運営にたずさわり、会員間それぞれで互選する。任期は一年とし留任を妨げない。
 7. 本会の経費は会費（年額千円）、寄付金その他の収入をもってこれに充てる。
 8. 本会は事務所を鶴見大学文化財学科合同研究室に置く。
- 付 平成11年10月16日から発足する。
付2 平成16年4月1日 一部改正

平成20年度の年間行事予定

文化財学会総会及び春季大会

日 時 6月7日（土）

総 会 午後1時から

講演会 午後3時から（予定）

会 場 鶴見大学会館メインホール

講 演 「やきものに見る桃山人の精神性
—志野・織部を中心に—」（仮）

講演者 学習院大学教授 荒川正明氏

文化財学会秋季シンポジウム

日 時 11月15日（土）午後1時から（予定）

会 場 鶴見大学会館メインホール

テーマ 「墓葬をめぐる諸問題」（仮）

鶴見大学文化財学会会則

1. 本会は鶴見大学文化財学会と称する。
2. 本会は鶴見大学文化財学科教職員・学生および卒業生、その他の関係者をもって組織する。
3. 本会は文化財にかかわる人文・自然諸科学の学問交流を活発化し、会員相互の研究を推進し、かつ親睦をはかることを目的とする。
4. 本会は総会を毎年一回開く。ただし必要に応じて随時会長がこれを招集することができる。
5. 本会はその目的を達成するために次の事業を行う。
 - 1 研究等の発表
 - 2 講演会の開催
 - 3 会誌・会報等の編集刊行
 - 4 研究部会活動

編集後記

学会委員になって、もう一年が経ちました。初めての大学生活に、春の講演会・秋のシンポジウムの準備などで慌しかったためか、あっという間の一年でした。

初めの頃は学会の活動を良く分かっておらず、どうすれば良いか分からないことが多く、先生方や先輩方に迷惑をかけてしまいました。それでも、先輩方に指導して頂きながら春の講演会・秋のシンポジウムを無事に終えて、活動にも一区切りがついて、安堵と達成感があります。

失敗することも多くありましたが、文化財学科や学会を通じて様々なことを学べたと思います。学会での経験を、これからの大学生活や卒業後にも活かしていきたいです。去年の反省を踏まえながら、これからも学会に取り組んでいきます。一年間ありがとうございます。

鶴見文化財学会報 vol.9 訂正とお詫び

鶴見文化財学会報 vol.9 に下記の誤りがございました。訂正をしてお詫び致します。

記

- ・ P7 「学会右見左見 文化財に触れる—実習IVを経験して—」

誤：今回の旅は「海外貿易」、キリスト教」

正：今回の旅は「海外貿易」、「キリスト教」

以上

また、非常用的な言い回し、漢字などは執筆者の表現を尊重するため、発刊した時の文章のままで掲載させていただきます。ご了承ください。